

「神の栄光」

エペソ人への手紙 1 : 3 - 6

October.10.2021

エペソ人への手紙 1 : 3 - 6 (パウロ)

Preface

私たち人間にとって最も深刻な問題は、神の栄光を見失ったことです。

ウェストミンスター小教理問答という、聖書教理を今で言いますと、ちょっとしたクイズ形式のような形で学ぶ教材がありますが、その第一問目の問いが「人のおもな目的は、何ですか？」という問いです。

そして、その問いに対する答えが「人のおもな目的は、神の栄光をあらわし、永遠に神を喜ぶことです」となっています。

なぜ、キリスト教教理を教える教材の第一問目が、神の栄光についての話かと言いますと、それほどに現存する世界が、神の栄光を忘れ、神の栄光が見えず、神の栄光なんかあたかもないかのように、人間の栄光の追求とその成就という、果かないやがて朽ち果てていく偽りの栄光が幅を利かせているからです。

神がお造りになったこの世界には、神の栄光が満ちており、神が神であられる神性がそこかしこに、ありとあらゆる所に良くあらわれています。

一杯の水、ひと塊の土くれ、意識せずとも肺いっぱい広がる空気、土のちりではない肉体から、言葉を語り、喜怒哀楽を表現し、物まで作り出す新たな命が誕生するという系譜、米粒よりも小さな種が大きな木となって成長し、その吐き出す息によって他のありとあらゆる命が呼吸し、

空に、海に、陸に広がる把握することも出来ないほどの多様な生物同士が互いの命を支え合いながら循環し、この地球のみならず、数えることも、行く着くことも出来ないほどに壮大な宇宙に存在する星々が、それぞれの持つ重力によって均衡が保たれていること等々、到底計り知ることの出来ない世界に満ちている神の栄光。

どこをとっても、何を見ても、どんなものに触れても、満ち溢れている神の栄光が、この世界には満ちています。 正に、

詩篇 19 : 1 (パウロ)

天は神の栄光を語り告げ、大空は御手のわざを告げ知らせる。

とある通りです。

しかしこの詩篇の言葉は、神が神であられることを、キリストにあって今一度知るように導かれた御霊に属する人だからこそ告白できる言葉であり、

この世の霊を受けた生まれながらの血肉のからだでは、どうやっても分かりえない神の栄光です。

同じものを見ても、一方はそこに神の栄光を見ますが、一方は、ただの現象、物体、良くて摩訶不思議な神秘的なもの、悪いと恐怖を抱きます。

そして、その神の栄光を知り得ないがために生じる恐怖を払拭しようと、私たち人間は、自らの手で偽りの栄光を作り出しました。

Part One

人は本来、神の栄光を教えられるまでもなく当然のように神の栄光を知り、神の栄光をあらわし、永遠に神を喜ぶ者として造られました。人は神の栄光を見失ってしまいました。

そしてその結果、栄光の神に取って代わって、人間自らが栄光になり得ると大きな錯覚と勘違いをし、神の栄光の下に生かされていることを忘れ去っていききました。

それからの世界はひたすらに、神の栄光のあらわれである被造世界が神の所有であるにも関わらず、人類のものだと思い違いしているかのように利用し、搾取し、壊し、消費し、人の栄光を追求していききました。

私たちはたったこの30年で、神の栄光を告げ知らせる地球上の自然物・動植物をひっくるめて、40%以上を消失させ、人工物は20%も増加させながら、時には立派なものを作り、時には立派な理論を打ち立て、時には編み出し作り出したものを神のように崇め、

誰がより栄光ある業績を示すことが出来るのかと、肉体や頭脳や経験を用いてがむしゃらに終わりなき栄光競争に没頭し、そして、傷を舐め合うかのように互いにその栄誉を讃え合い、そこに権威まで付与しながら、自己満足と自画自賛に明け暮れながら、世界を回してきました。

もちろん、文明の発展には、神の恵みと導きがあることが確かだと思いますが、神の栄光を見失った文明が道に迷い、糸の切れた凧のようにも見える状態になっていることを、私たちは今経験しています。

それでもなお、ここまで積み上げてきた栄光を否定することは、自らを否定することになるので、出来ません。

否定する代わりに、「ここに至るまでの高度成長を担ってきた自負と実績ゆえ

に、今の生活が出来ていることに感謝しているし、感謝して欲しい」と、声高らかにのたまいます。

そこには、神の栄光を見失ったという、神への悔い改めはありません。

ある聖書の学び会の中で、参加者のお一人が、聖書的などいましょうか靈的洞察力をもって、神の栄光を忘れた世界の核心を突くような話をされたことを覚えています。

その方は、こんなことを仰いました。

「何とか賞、何とか賞、何とか賞という賞のつく栄誉がたくさん世の中にはありますが、例えば毎年あるノーベル賞の受賞の席で、人が栄光を受けるのではなく、その世紀の発見や発明に至らしめた大元の材料やシステムをとうの昔に構築された神様に栄光を帰すべきなのに、人間は、神様のものを盗んで、自分たちの栄光に挿げ替えていますよね。」

やがて朽ち果てていく人間の栄光を表すバベルの塔のような代物が無数に打ち立てられ、立ち並びすぎて、そのためにギスギスし、ギクシャクし、ささくれ立って、息苦しくなっても、まだまだ栄光が足りないと、崩れ去っていく栄光の架橋を作り続け、バベルの塔の偽りの栄光から目を離すことが出来ません。

このことを、使徒パウロはローマ書でこんな風に言っています。

ローマ人への手紙1：18－25（パウロ）

私たち人間は、神の栄光を愚かで朽ち果てて行くものに挿げ替え、心の欲望のままに偽りの栄光に仕えていくようになりました。

私たちのこの造られし被造世界は、本来、神の栄光に満ちた世界であり、神の栄光を語り告げ告げ知らせることを目的として造られました。

そして、その栄光を誰よりも明確に認識し、告げ知らせる目的を果たすための最たる存在が私たち人間ですが、神の前に罪を犯した人類は、生まれながらにして神の栄光を見ることの出来ない者となってしまいました。

Part Two

罪と言いますと、私たちは普通、悪いことをした、いけないことをしたというような行為や言動ばかりが思い浮かびますが、

聖書は、神の栄光からどれだけ離れており、神の栄光を知ることもなければ、神に栄光を帰すこともないということが罪の本質であると言います。

使徒パウロが、ローマ書（3：23）で、「すべての人は罪を犯して、神の栄光に達することが出来ない」と言った通りです。

すべての人間には宗教心はありますが、神様に当然帰すべき栄光を帰すこともなく、神の栄光をくだらないものに置き換えました。

罪とは、倫理道徳的な次元で見ますと、悪で、卑怯で、汚くて、見苦しくて、不法なものだという性質がありますが、聖書が罪を論じる時にはいつでも、神様から逸脱していることを罪と言います。

つまり、神様から逸脱した結果、悪で、卑怯で、汚くて、見苦しくて、不法なものになるわけです。

すべての罪は、神様から逸脱しているから生じ、神様と敵対的關係にあることが原因です。

この神から逸脱した關係にある者たちが、再び、神との關係に至らしめ、神の栄光を悟らせ、神の栄光の前に跪き、神の栄光のために生きるように変えられることこそ、救いの本質です。

救いとは、私たちが罪の項目から救い出すこと、殺人を犯したとか、泥棒を働いたとか、嘘をついたとかという犯した罪の項目から救い出すことではありません。

神を知らず、神が栄光なる方であることも知らず、その栄光の前に跪くという自分の立ち位置が分からなかったところから、神の栄光とその權威の前にかしずいて礼拝すること、栄光を帰し神をほめたたえること、ほめたたえたいくなること、ほめたたえずにはいられないという位置に戻されること、回復すること、これが救いの本質です。

Part Three

そして、今日の聖書箇所のエペソ書 1 : 3 - 6 の御言葉です。

もう一度読んでみます。

エペソ書 1 : 3 - 6 (パウロ)

救いを、私たちの想像を遥かに超える神様側からの視点で描写しているものすごい文章ですが、

神がキリストにあって、世界の基の置かれる前から、私たちをご自分の子にしようと選び、神の御前に聖なる傷のない者にするという天上にあるすべての霊的祝福をもって祝福して下さったという救いの事実を、今ここでパウロは何をもって結論付けるかと言いますと、神の栄光です。

神の救いを説明するにあたって「ほめたたえる」という言葉から始めて、「神の栄光がほめたたえられるためだ」という言葉でサンドイッチしながら、「罪の中に死んでいた生まれながらの罪人を救い出すことをもってして、神は、神の栄

光をあらわすとお決めになったんだ」と言います。

この栄光は、自然の営みに映し出される神の栄光とは比較にならないものです。

先程も言いましたように、確かに、自然界にあらわれる神の栄光は、とんでもなく壮大で、スケールの大きいものですが、そこには、神様のこう何と言いましょか、人との関係にのみあらわれる神様の奥深い人格、人格と人格がぶつかり合いながら織り合わされていく神様の深い配慮やその懐の広さや底なしの知恵や「わたしの心は沸き返り、熱くなっている」というほどの激しい愛までは、反映されていません。

ひとり子イエスの贖いによってなされた救いのわざにこそ、野暮ったいほどに人間臭い温かい人格に満ちている神の栄光のあらわれなんです。

そしてこの救いは、私たちの感動や感激が第一の目的ではありません。

私たちが救いを考える時に良くしてしまいがちなのは、救われてうれしい、救われて素晴らしい、救われて恵みを受けたというような感激が主だってしまい、神の栄光が目的であることを見逃してしまうということです。

私の涙、私の清々しさ、私の魂の震え等がより強調されてしまい、救いについて論じる時、神の栄光が見過ごされてしまうことが少なくありません。

もちろん、イエス・キリストにあって罪赦され救われたという恵みの感激も救における大事な一要素ではありますが、私たち自身の喜びが第一の目的ではなく、神の栄光がほめたたえられることが要です。

ともすると私たちは、神の栄光を悟り、神の栄光の下に招かれたということよりも、私の幸福という自己中心的なものをもって、救いの結果と目標を定めてしまいましたが、聖書が救いを語る時は、いつも神の栄光が先んじます。

例えば、2000年前の初めのクリスマスの時、野原で夜番をしながら過ごしていた羊飼いたちに天の軍勢が現れて、イエス様の誕生を知らせる場面がありますが、そこで何と告げるかと言いますと、

ルカの福音書2：14（パワポ）

「いと高き所で、栄光が神にあるように。

地の上で、平和がみこころにかなう人々にあるように。」

と告げます。

神が創世以前からご計画され、実行された救いのわざの Climax は、主イエス

の誕生であり、主イエスの十字架上の死であり、主イエスの死よりの復活ですが、その主イエスがお生まれになった時の一番最初の言葉が「栄光が神にあるように」です。

主イエスをお送りになったことを、「悲しみであり、犠牲である」とは言わずに、「神に栄光がある」と言います。

そしてその次に、その救いの恵みをいただく側の私たち、つまり「『地の上の人々に、』平和があるように」と続きます。

この順序をしっかりと認識する必要があります。

神の救いにおいて、私たちの感激や幸福や平安が先んじるのではなく、神の栄光が真っ先です。

聖書が救いについて論じる時、どれだけ“神の栄光”という言葉を用いているのかを、私たちはしっかりと知っておく必要があります。

第二コリント4章に行ってみましょう。

イエス様のことを人に伝える伝道において、その語る福音を何と言っているのか見てみてください。

コリント人への手紙第二4：5－6（パウロ）

「イエス・キリストを宣べ伝える福音のことを真理とか、何かの悟りのようなものだ」とは言いません。

「福音の核心は、神の栄光だ」と言います。

福音とは神の栄光を知ることだと、そして知ったならば、神の栄光を知るための知識がさらに輝いていくことだと言います。

ヨハネの福音書1章では、光であられるイエス様がいらっしゃったことを、「私たちは栄光を見た。父なる神のひとり子の栄光を見た」と言い表します。

このように、聖書が救いを語る時、いつも「神の栄光」が先んじます。

なのに、その事実を、私たちはそんなに注意深く見ようとはしません。私の思いや体験や感激を先んじさせようとしてしまいます。

Part Four

神の救いのわざは、どこまで行っても、神の栄光が目的であり、私たち個々人それぞれの喜びや感激が優先されるものではありません。

つまり、神の御心によって始まり、神の喜びを根拠とし、神の栄光が目標であ

り、私たちの反応に従ってなされたり、なされなかったりするものではないということです。

そしてこのことが、どんなに感謝なこと、安心できる堅固な祝福なのか計り知れません。

考えてみてください。

私たちが信仰生活を送っていく中で揺るがされる時というのは、いつもこういう時ではないでしょうか？

信仰生活に怠慢だったり、自信を無くしたり、踏み外したりした時、「こんなんでも、本当に私は救われているのだろうか？ こんなんで、本当に最終的な救いに達することができるのだろうか？ こんなんでも、神様は私を愛してくださっているのだろうか？」ということが、どれだけ私たちを不安にさせることか・・・

でも神様は、私たちに愛されるべき何か特別な要素や要因があるから愛しておられるのではなく、また救いに与るべき資格や条件が整っているから、救いのわざを始めなされたわけでもありません。

私たちの行いや自慢やプライドや誇りなどの入る余地がないことが残念なのではなく、むしろ、どれだけ感謝なことか、どれだけ自信を与え、どれだけ確信を与えてくれることか分かりません！

「私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死なれた！」という事実が、踏み外したその場所から、または恥と羞恥と恥ずかしさしかないその場所から今一度起き上がり、「私は失敗するけれども、主なる神様は失敗されない。私は愚かで、あくどいけれども、主は誠実で、主の愛は限りなく、その愛を遮ることの出来るものなどない！」と告白し、私たちを召し出したその愛の前に、また信仰に生きることを何度でも決心し直しますし、仕直すことができます。

そして、少しずつ、少しずつ、神を知っていきます。

結局のところ、信仰とは、他の何物でもない、神様が何者なのか、どういうお方なのかを知っていく戦いです。

私たちに与えられている救いは、私の実力とか、私の熱心によって頂いたものではなく、神様の恵みによって与えられたものであるがために、

私たちの信仰の深まりもまた、私たちの力によるものではなく、私たちを救い出した神様がどういうお方なのかを知ることと比例するしかありません。

だから私たちは、いつまでも過去にさかのぼって、「こんな私のような者をお救いくださった」という感激に浸ることばかりに執着して、「今はあの時の感激

がない」と過去と比較して嘆くのではなく、今、神様が栄光だと仰る、御前に傷のない聖なる神の子とする過程に入れられているんだと、

私が経験した失敗、私が経験した挫折、私が経験したうぬぼれ、私が経験した感謝、これすべてひっくるめて神の栄光だと約束してくださっている神様に栄光を帰すために、今を生き抜くのです。

そして、神様がどういうお方なのかを知っていくのです。

神様のやり抜く力を信頼して、神の栄光のために生きるのです。

Conclusion

かと言って、何でもかんでもどうにでも、生きていいという事ではありません。

神の栄光を知り、神の栄光に入れられ、神の栄光を知る知識が輝かされる特権に与った者としての自覚を持って生き抜くんです。

最後にイエス様の言葉を見てみたいと思います。

マタイの福音書 5 : 16 (パワポ)

イエス様が、皆さんに、私たちに要求しておられることです。

「あなたの行いに、天の父なる神様の栄光が見られますか？

あなたの行いをもって、人々が天の父なる神様を崇めるようになりますか？

あなたは、天の父なる神様に、人々が栄光を帰すことができるような良い行いをしていますか？」と問います。

イエス様は出来ないことを前提に問うておらず、出来ることを、失敗したっていいし、挫折したって構わないを含めて、出来ることを前提に、私たちに問うておられます。

神の栄光を知り、神の栄光に入れられ、神の栄光の完成を約束されている者としての自覚と責任を、今も、私たちはイエス様から問われています。

人は、神の栄光に生きる時、初めて、人らしく生きられます。

お祈りいたします。

祝祷：エペソ書 1 : 6